

『色』で辿る大地と歴史 7 「朱(朱砂)と真名野長者伝説」

照山 龍治

I. 伝説に刻まれた“朱”の価値 — 歴史の入口としての民話

「朝日さす、夕陽輝く——」。

この印象的な語り出しで知られる“長者伝説”は全国に広く分布するが、大分県に伝わる「真名野長者伝説」は、その中でも特に地域の歴史と深く結びついている。

この伝承歌には、

「黄金千杯、朱がめ千杯」とあり、朱(朱砂)が黄金と並び称されている。

朱砂は古代から顔料・医薬として重宝され、金に匹敵する価値を持っていた。

この地域が朱砂の産地であったことを考えると、伝説が単なる物語ではなく、地域の鉱山文化を反映した歴史的記憶であることが見えてくる。

柳田国男が紹介した「炭焼き小五郎」の話では、都から来た姫が渡した“金”を、小五郎が“石”と思い込み水鳥に投げてしまう。

この“金”を

①文字通りの黄金とする説

②朱砂(辰砂)と解釈する説

があるが、いずれにせよ貴重な鉱物が身近に存在した地域性を示している。

II. 内山観音と金亀ヶ淵 — 伝説の地層を歩く

真名野長者伝説の舞台である内山観音を訪れると、境内裏手に「炭焼き小屋跡」とされる場所がある。

石垣には赤みを帯びた石が混じり、朱砂を思わせる色が見られた。



道を挟んだ向かいには金亀ヶ淵がある。

物語絵巻では「淵に黄金が渦

巻き、黄金の亀が浮かび上がった」と描かれている。実際に覗き込むと赤い石が見えるが、朱砂と断定できるものは確認できなかった。



さらに山道を登ると、**真名野長者の墓**と伝わる石塔、そして山頂には巨大な**般若姫像**が立つ。

伝説の人物が、地域の信仰と結びつきながら今も語り継がれていることを実感する。



Ⅲ.般若姫伝説と白杵石仏 — 朱砂文化が生んだ造像の地

真名野長者伝説は、**般若姫の悲劇**へと続く。

皇子と結ばれた般若姫は都へ向かう途中で遭難し、十九歳で亡くなる。

長者は悲しみのあまり、中国から**蓮城法師**を招き、満月寺を建立。法師に**石仏の造立**を依頼した—これが**白杵石仏の起源**とされる。

白杵石仏は平安後期～鎌倉期の作とされ、60余体のうち59体が**国宝に指定**されている。

石仏には**赤・黄・黒**などの色が残るが、分析によれば顔料はベンガラや黄土であり、朱砂は使われていない。

それでも、朱砂の産地であった地域に石仏文化が花開いたという点は興味深い。

近くの**化粧の井戸**は、玉津姫が顔を洗ううちに**アザ**が消えたと伝わる井戸で、水は乳白色に濁る。郷土史家によれば**朱砂**を含むとされ、**皮膚病に効く**と信じられてきた。

ここでも、鉱物と信仰が結びついた地域文化が見て取れる。



Ⅳ.満月寺と丹生の地名 — 地質・信仰・中央とのつながり

満月寺には**蓮城法師**と**真名野長者**夫妻の石像が祀られ、案内板には「隋の天台寺から仏像を携えて来朝した」と記されている。

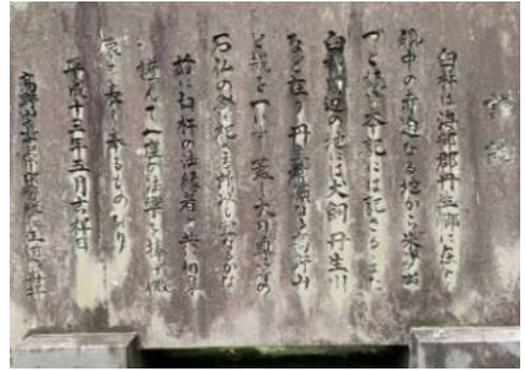
境内に残る**高野山真言宗 宗務総長**の「**謹誌**」には、**続日本紀**の記述として、「**白杵の赤迫から朱砂が産出した**」とある。

白杵周辺には「**丹生 (にう)**」の地名が残る。丹生は古来、**朱砂の産地**を意味し、高野山の**丹生都比**



売神とも深く関わる。

つまり、白杵の朱砂文化は、中央の宗教・政治と結びついた広域的な文化圏の一部であったということがわかる。



V. まとめ — 「色」を入りに地域を読み解く

(1)真名野長者伝説は、①朱砂の産地としての地域性、②鉱物資源をめぐる歴史的背景、③信仰・造像文化の成立、④中央との交流、といった多層的な要素を含んでいる。

(2)「黄金か、朱砂か」という議論を超えて、この地域が“色”を通して歴史を語る場であったことこそが重要である。

(3)豊後大野市三重の玉田、白杵市深田——中央構造線上に位置するこの地は、朱の色を宿し、伝説・地質・信仰が重層する“色の大地”である。

(4)研究会として「色を入りにした地域の学び」を進める上で、真名野長者伝説は、地域文化を読み解く格好の教材となるだろう。